

(4) 実践事例

ア A校第2学年の授業の実際〔授業の質的改善のプロセス（A校の実践）-1の10月の実践〕
「近畿地方」（本時5/5）

本時に取り入れる教師の手立て




- ・自分の考えをまとめる場を設定するとともに、ワークシートに合わせた書き方やキーワードに沿って、根拠となる資料を示してまとめるように促す。【C②③】
- ・単元の学習を振り返らせ、単元を貫く学習課題に対する自分の考えを整理しながらまとめるように促す。【C④】

本時の目標

歴史的景観を構成する建築物等に住民人々の生活を通して、環境問題や環境保全に対して多面的・多角的に考察し、歴史的景観を保全するための取組を考案している。 【社会的な思考・判断・表現】

本時の授業の様子

.....質的改善を図った手立て

学習活動	教師の働き掛け（○）と評価【】
1 本時の学習内容の見通しをもつ。	○単元を貫く学習課題「これから環境問題をどう解決したらよ いだろうか」を確認し、本時のめあてと授業の流れを電子黒 板に提示することで、本時の学習内容を確認できるようにし た。
<p>【めあて】歴史的景観を守っていくための手立てを考えよう</p>	
2 写真を比較して、気付いたことや 読み取れることを発表する。	○2枚の写真を電子黒板に提示し、 生徒が気付いたことに対して問い 返すことで、本時の学習内容に対 する興味・関心を高めた。
<ul style="list-style-type: none"> ・電柱の地中化 ・京都市内のコンビニエンスストア 	 <p>写真1 何が違うかな？(京都市)</p>
3 電柱を地中化させる理由とコンビニ エンスストアの色が違う理由を考 える。	○「京都市はどのような特色をもった都市だった？」など、京 都市の地域的特色について問い掛けながら、歴史的景観を保 護する取組に気付くように促した。
4 写真を見て、神崎市にも歴史的景 観があることを知る。	○神崎市に見られる歴史的景観を電 子黒板で提示することで、歴史的景観を 身近なものと感じられるようにした。
 <p>神崎市歴史的建築物</p>	<p>【神崎市の景観】</p>
5 グループで話し合い、神崎市に見 られる歴史的景観の写真から、歴史 的景観を守っていくための取組を考 案する。	○環境問題や環境保全に対して多面的・多角的に考察できるよ う、以下の考えるポイントを掲示し、そのポイントを視点と して話し合うように伝えた。 【評価】
	<ul style="list-style-type: none"> ・住民の利便性（便利さ） ・行政（区市町村）、企業、個人としてできること ・歴史的景観の活用法
<p>【取組を考案している様子】</p>	

<p>6 グループの意見を発表する。</p> <p>7 単元の学習を振り返り、単元を貫く学習課題について考える。</p>	<p>○文章表現を行う場を設定するとともに、ワークシートに合わせた書き方やキーワードに沿って、根拠となる資料を示してまとめるように促した。【C②③】</p> <p>○代表者の意見を全体で共有することで、自分の考えを深めることができるようにした。</p> <p>○単元の学習を振り返らせ、単元を貫く学習課題に対する自分の考えを整理しながらまとめるように促した。【C④】</p>
--	---

本時の授業の評価規準の考察

評価規準	歴史的景観を構成する建築物等に住む人々の生活を通して、環境問題や環境保全に対して多面的・多角的に考察し、歴史的景観を保全するための取組を考案している。 【社会的な思考・判断・表現】		
判断する目安 (判定基準)	十分満足できる状況(A)	おおむね満足できる状況 (B)	努力を要する状況(C)
	○(B)に加え、住民の利便性や観光資源としての役割を踏まえて、取組を考案している。	○環境問題や環境保全に対して行政・企業・住民の立場を踏まえて、自分なりに歴史的景観を保全するための取組を考案している。	(B)に達していない状況
→(B)、(C)と判断した生徒への支援		→一般的な取組を考案することができる生徒には、住民の利便性や観光資源としての役割にも着目させる。	→取組を考案できない生徒には、考えるポイントを確認させ、話し合ったことを整理させる。
評価方法	ワークシートの記述		

本時の評価規準「歴史的景観を構成する建築物等に住む人々の生活を通して、環境問題や環境保全に対して多面的・多角的に考察し、歴史的景観を保全するための取組を考案している」についてA評価の生徒が22人、B評価の生徒が10人でした。A評価の生徒は、3つ以上の様々な立場からの現実的な内容を含む取組が考案できており、B評価の生徒は2つ以上の取組が考案できていました。チェックリストC②③の手立てを取り入れ、ワークシートに合わせた書き方やキーワードに沿って、根拠となる資料を示したことで、それぞれのグループでの考えと意見交換を基に課題に対する自分の考えを発展させ、様々な立場から身近な地域の景観保全について考察することができていました。また、内容に関しても、歴史的景観を活用しながら保存していく方法を考えたり、補助金を出すにしてもその補助金をどうやって捻出するのか考えたりしており、多面的・多角的に保存していく方法の考察ができていました。このような多面的・多角的な考察を促したのもグループでの話し合い活動があったことが要因であると感じました。考案に困っていた生徒も他の生徒と意見を交換していく中で考えが広がったり深まったりして、様々なアイデアを出す姿が見られました。課題としては、多くの生徒が実現させることができるかもしれない内容の考察を行っていたのに対して、非現実的な保存方法に終始したグループがあったことです。他のグループの発表を聞いた後に、自分の考察を更に深める場面設定があれば、より現実的な内容を考案できたと考えられます。

本時の成果と課題（○成果、●課題）

(1) 取り入れた教師の手立てが、生徒の「主体的・対話的で深い学び」につながっていたか。

- 授業の課題把握の場面において、電子黒板を使って写真の比較をさせたことにより、生徒の興味・関心を高め、主体的に学ぼうとする意欲につながることができました。
- グループでの考察の場面において、考察のポイントを示したことにより、話し合いが多面的・多角的な考察を伴うものになりました。
- 他グループの発表を聞かせ、その後教師がフォローしたことで課題についての考えを深めることができました。
- より身近な例を取り上げたことにより、自分たちの生活環境に照らし合わせて考察することができ、より主体的な考察につながりました。
- 振り返りの場面で、環境問題全般について環境改善の大切さを考察させたことにより、単元を貫く学習課題に迫ることができました。
- グループでの発表にとどまったので、意見の共有後に個人での考察場面を設定することで、より考えが深まるのではないかと感じました。

(2) 教師の手立てが、生徒の資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）の育成につながっていたか。

- 近畿地方の単元を貫く学習課題「これからどう環境問題を解決していくか」について、より身近な地域社会の問題について取り入れていったことで、環境問題をより身近な問題として捉えることができ、「学びに向かう力、人間性等」の育成につながっていると感じました。
- 環境問題や環境保全に対して多面的・多角的に考察できるよう、考えるポイントを掲示したことによってグループ活動の際、自分の考えを他の生徒に伝えることができ、「思考力、判断力、表現力等」の育成につながっていると感じました。
- 学習課題について考察する場面は多かったのですが、「知識及び技能」を定着させるための活動を取り入れる必要があると感じました。

(4) 実践事例

イ B校第3学年の授業の実際〔授業の質的改善のプロセス（A校の実践）-14の9、10月の実践〕
 「裁判員として刑事事件を例に司法制度について考えよう」（本時6/6）

本時に取り入れる教師の手立て

- ・学習内容を確認できるように、事件の概要について問い返しをしながら、まとめる時間を設定する。【C①】
- ・単元を貫く学習課題を振り返り、根拠となる資料を基にして自分なりの最終結論を出すように促す。【C④】
- ・現代の社会問題につなげることができるように、県内で発生した刑事事件を紹介し、学習内容との関連について触れる。【C⑦】

本時の目標

模擬裁判を通して、多面的・多角的に事件を捉え、根拠を基に自分なりの考えを記述することができる。 【社会的な思考・判断・表現】

本時の授業の様子

〔質的改善を図った手立て〕

学習活動	教師の働き掛け（○）と評価【】
1 模擬裁判で取り上げる刑事事件の内容を把握するため、資料を音読し、学習の見通しをもつ。	○単元を貫く学習課題を示し、本時の学習内容を確認した。 ○あらかじめ音読させる資料を用意し、模擬裁判で使用する傍聴用ワークシートを配付して単元を貫く学習課題に対する関心を高めた。
<p>〔単元を貫く学習課題〕 裁判員の模擬裁判を行い、自分の考えを伝えよう</p>	
2 模擬裁判の大まかな流れを聞く。	○事件の概要を把握できるように、検察官、弁護人の主張を聞いた後、事件関係者の証言と関連付けて考えるように促した。その際、電子黒板を活用した。
3 模擬裁判を行う。 ① 起訴状朗読、罪状認否 ② 冒頭陳述 ③ 証拠説明 ④ 証人尋問 ⑤ 被告人質問 ⑥ 検察官の論告・求刑、弁護人弁論	○事件の概要を把握できるように、模擬裁判の大まかな流れを電子黒板で表示した。 ○模擬裁判の内容をより理解しやすくするために、模擬裁判の流れに沿って、傍聴用ワークシートに被告人が有罪か無罪かに該当するものに色を付けていくように指示し、記入できているか段階ごとに確認した。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 有罪：赤色の下線を引く。 無罪：青色の下線を引く。 判断できない：青色の下線を引く。 </div>



【ワークシートに記入している様子】



【模擬裁判の様子】

4 グループで「被告人は有罪か無罪か」について話し合い、評決を行い、その判決理由も併せて考える。

○授業の最後に自分の考えを記述することができるように、劇で演者をした生徒も裁判員として話し合い活動に参加することを伝えた。

○話し合いがスムーズに進むように、傍聴用ワークシートにメモしたことを活用しながら話し合うように促した。評決が決まらなければ多数決を採って決めるように伝えた。なお、グループでの話し合いが深まるように、以下の視点で話し合うように伝えた。

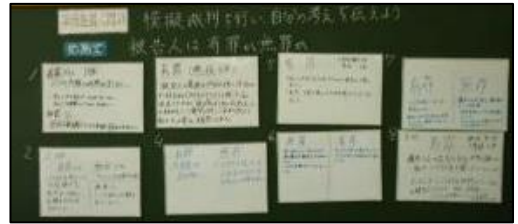
- ・台本からの事実を抽出したか。
- ・抽出した事実をどのように評価したか。
- ・推定無罪の原則に違反していないか。

5 グループの意見を発表する。



【グループごとの意見を聞いている様子】

○全体で各グループの意見の共有ができるように、グループごとにホワイトボードにまとめたものを掲示した。



【各グループの意見】

○グループにより結論が異なったので、さらに反論を促して考えを深めさせた。

6 最終的な自分の考えをワークシートに記述する。

○学級全体での意見交換を受けて、根拠を基に自分なりの最終結論を出すように促した。 【評価】

○学習内容を確認できるように、事件の概要について問い返しをしながら、まとめる時間を設定した。 【C①】

○単元を貫く学習課題を振り返り、根拠となる資料を基にして自分なりの最終結論を出すように促した。 【C④】

○単元の学習内容について振り返り、判決に至るまでの過程は、人それぞれ異なる考えの基で判決に行きついていることに気付かせた。

○現代の社会問題につなげることができるように、県内で発生した刑事事件を紹介し、学習内容との関連について触れて終末とした。 【C⑦】

本時の授業の評価規準の考察

評価規準	模擬裁判を通して、多面的・多角的に事件を捉え、根拠を基に自分なりの考えを記述している。 【社会的な思考・判断・表現】		
判断する目安 (判定基準)	十分満足できる状況(A)	おおむね満足できる状況 (B)	努力を要する状況(C)
	○(B)に加え、他の生徒の意見に対する賛成意見や反対意見を盛り込みながら、自分なりの考えを記述することができる。	○事件について根拠を基に、弁護側と検察側の主張を取り入れ、自分なりの考えを記述することができる。	(B)に達していない状況
→(B)、(C)と判断した生徒への支援		→他の生徒の意見を参考にするように声掛けをする。	→証拠資料や模擬裁判の台本を再度確認させ、自分の考えを整理させる。
評価方法	ワークシートの記述		

判定基準A～Cに分けると、Aが9人、Bが24人、Cが0人となりました。C評価の生徒がいなかったことから、「根拠を基にして自分の考えを記述する」という点では、全員が達成することができていました。学習内容を確認できるように、事件の概要について問い返しをしながら、まとめる時間を設定したり、単元を貫く学習課題を振り返り、根拠となる資料を基にして自分なりの最終結論を出すように促したりしたことで、自分の考えを十分に検討することができていたからであると考えられます。しかし、A評価の生徒と比較すると、「多角的に事件を捉える」ということが不十分であることが分かりました。グループ学習で他の生徒の考えを聞いたにもかかわらず、その考えを自分の意見と照らし合わせたり、比較したりすることがうまくできていなかったのではないかと考えられます。A・B評価の生徒の文章記述量に差異はありますが、全員が自分の考えを記述することができたことから、学習課題に対する意欲や関心は高まりが見られました。同時に、他の生徒との議論を自分の考えにフィードバックして記述する表現に課題があることが見えてきました。

この課題を解決するための方法として、意見文を書くときのモデルを用意しておく必要性を感じました。「自分の意見」「理由」「根拠となる資料」「自分の意見に対する反対意見」「反対意見に対する反論」「まとめ」の順に文章を記述していくということを指導する必要があります。「反対意見に対する反論」の部分を意識することで、他の生徒との議論を注意深く聞くことにつながり、深い学びの実現にもつながると思われまます。

本時の成果と課題（○成果、●課題）

(1) 取り入れた教師の手立てが、「主体的・対話的で深い学び」の生徒の姿につながっていたか。

- 模擬裁判の朗読劇を行うに当たって、事前に台本を配って事件の証拠を調べる活動を取り入れていたので、グループで有罪か無罪かに分ける話し合い活動をスムーズに行うことができました。
- 模擬裁判の朗読劇で役割分担を行って実演し、全員が裁判官の立場で事件に対する判決について、グループごとに自分の考えを述べて審議を行うことができました。
- グループで話し合い活動を行わせた後、学習内容を共有化する際にどのようにして伝え合うことが適切なのか検討の余地がありました。

(2) 教師の手立てが、生徒の資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）の育成につながっていたか。

- 模擬裁判後にグループの審議を行い、裁判で登場した証拠や証言などの資料を基にして有罪か無罪かを決め、理由も併せてホワイトボードに書いて全体に発表しました。また、判決については、全体で共有化した後、各グループで出た意見を参考にして最終的な自分の考えをワークシートに記述し、「思考力、判断力、表現力等」の育成につながったと思います。
- 裁判に関する知識については、刑事事件に関する模擬裁判だったため、扱っていない用語がありました。模擬裁判は、ロールプレイングができる反面、単元全体を網羅することができないため、単元を貫く学習課題の再検討が必要だと感じました。